



インド国ビハール州ブツダガヤ 印度山日本寺駐在日記から(1)

法務部 廣瀬晴彦
ひろせはるひこ



印度山日本寺外観

印度山日本寺について

インドが独立してから約15年が経った昭和22年(1947)当時のインド初代首相であるネルー氏の発言からすべてが始まりました。それは「マハトマ・ガンディー師の教えである宗教の融

和による平和の実現」でした。ネルー氏はブツダガヤを仏教による世界平和と実現の拠点にすると言明されたのです。それから氏は各仏教国に呼び掛け始めました。この呼び掛けに応えた中に、日本の仏教会がありました。宗派の違いを超えた日本の仏教会

として、積善への報恩感謝の足場とするべく財団法人国際仏教興隆協会を立ち上げました。当時ブツダガヤにはホテルなどの宿泊施設は一つもありませんでしたので、まず日本の方々に安全にこの地を巡礼していただくための宿泊施設として国際佛教会館を建立しました。そして、その3年後の昭和48年(1973)にブツダガヤの外国寺院として6番目となる純日本寺院建築の印度山日本寺を建立しました。この当時、国際佛教会館初代理事長として日本寺建立に力を尽くしたのが、祐天寺20世巖谷勝雄上人でした。

2年の駐在を終えて
桜が咲き掛けた3月の終わりの、まだ冬の香りが肌に染み中、私は成田空港から旅立ちました。それからの約2年間(平成25年3月初旬〜平成27年3月末)、お釈迦さまのお覚りの地インド国ビハール州ブツダガヤにある印度山日本寺において駐在僧として勤めてまいりました。本紙を通して、私のインドでの体験を伝えていきたいと思います。



日本寺の現在の活動としては、日本の仏教徒の方々へ安全にブツダガヤの仏蹟などを参拝していただくためのお手伝いをしたり、無料の医療施設である光明施療院と、無料の保育施設である菩提樹学園を併設して福祉活動を行ったりしています。さらに現地地でトラブルに巻き込まれた日本の方を保護し、大使館と連携を取って日本まで無事に送り届けるなどの活動もしています。

は学生のように大きなバックパックを背負って貧乏旅行をし、2度目は浄土門主・浄土宗総本山知恩院86世門跡であり印度山日本寺4世住主でもあられた中村康隆院下のご納骨法要に参列するための祐天寺主催の団参でした。このときはまだ、まさか日本寺の駐在僧として再びこの地に戻ってくるなんて想像もしていませんでした。

が季節限定の空港であり、10月初旬から3月初旬の巡礼シーズンにしか飛んでいません。この期間以外に訪れるためには、この長距離の列車移動しか方法がありません。

日本寺に到着すると、私の前任者である奈良・東大寺の僧侶が出迎えてくださいました。日本寺は超宗派つまり宗派を越えた日本仏教の寺院なのです。日本寺の駐在僧はその時々で宗派も人数も違います。私の駐在中には華嚴宗と臨済宗の僧侶と一緒に勤めることができた大変貴重な期間がありました。前任の僧侶からいろいろなお話を伺えれば朝のお勤めが終わります。

また、日本寺にはバックパックと呼ばれる若い旅行者の方々も多く訪れます。彼らはブツダガヤという地を訪れて仏教に触れ、仏教をよく知りたくて感じています。そこで仏教についてじっくりお話しし、一緒に夕方のお勤めに参加していただいたりもしています。

世界平和を願って行進する僧侶たち



日本寺のインド人スタッフとともに

- 正誤記述一覧
右の記事中に誤記・誤植がありましたので当該文字列に傍線を付しまして訂正文言を記します。
- 1 = 12年
 - 2 = 昭和34年(1959)
 - 3 = 仏教界
 - 4 = 仏教界
 - 5 = 国際仏教興隆協会
 - 6 = ブツダガヤ近くのガヤ空港行き
 - 7 = 3月下旬までの
 - 8 = 建立当初から

参座された日本人旅行者やさまざまな国の方々と外のお茶屋さんに行き、お茶を飲みながら仏教のことやインドのことを話しながらゆつくりと過ごします。その後、現地のインド人スタッフが日本寺に集まって朝礼を行い、その日の法務が始まります。時折、各国のお寺から法要のお誘いをいただき、その国のお寺に伺って一緒に法要を勤めることもあります。上座部仏教・チベットト仏教・日本仏教・中国仏教と

